

明治前期の名所案内記にみる 京名所についての考察

長谷川 奨 悟

- I. はじめに
- II. 明治期の京都で刊行された地理的知識を取り扱う書籍の刊行動向と分析対象
 - (1) 刊行動向の特徴とそのコンテクスト
 - (2) 分析の対象
- III. 明治10年代の名所案内記の特徴
 - (1) 『開化絵入京都見物独案内』について
 - (2) 『花洛名所独案内記』について
 - (3) 『京都名勝一覧図会』について
- IV. おわりに

I. はじめに

明治18 (1885) 年、文字もじとみのすけ富之助が編纂した『開化絵入京都見物独案内』は、京都・大阪・東京の3地域で計8ヶ所の発売所から刊行された。表題に「開化」と明記されたこの名所案内記には、明治初期に新設された西洋風の建築物や鉄橋が京都の「新名所」として紹介されており、名所の近代化や名所観の変遷を考えるうえで大変興味深い内容となっている。野間光辰は、『新選京都叢書』に収録するにあたり本書の内容を精査し、明治前期京都の近代化をみる上で有益な資料の一つであると、「解題」において高く評価している¹⁾。

本研究の中心的な関心は、明治前期京都で刊行された名所案内記²⁾や地誌など、地理的な知識に関する書籍の中に叙述される、「名所」・「名勝」といった場所認識とその表象化

に関する考察にある。近代の案内記類³⁾や地誌の系譜に関する考察、もしくは近代を対象とした名所研究には以下のようなものがあげられよう。研究史の整理と展望は別稿とし、ここでは研究動向の一例を述べるに留めたい。

まず、案内記類や地誌の系譜に関する論考は、道中記や旅行案内記について分析した山本光正⁴⁾や、岩佐淳一⁵⁾の成果が注目されよう。彼らが系譜を考察するに当たって分析対象とした資料は、鉄道沿線案内といった掲載地域が広域にわたるものばかりであり、それ以外の特定の地域に特化した名所案内記の系譜について考察したものは管見の限りではほとんどみられない。一方で、近代を対象とした名所研究は、例えば羽生冬佳⁶⁾や馬場知子⁷⁾らの論考に代表されるように、東京の都市景観や風景の変遷に関するものや、地方では西田正憲⁸⁾の瀬戸内に関する風景や風景観に関するものなどがあげられるだろう。しかし、ここでの名所研究では、筆者が関心を寄せている近畿地方（近世は上方とされた地域）における名所観や風景観についての検証は、ほとんどおこなわれていないようである。

次に、地理学的な立場からは以下のようなものがあげられる。例えば、都市の近代化と「近郊の名所」の創出について論じた加藤政洋⁹⁾や、絵葉書と写真帖から風景の生産と風景の実践について論じた島津俊之¹⁰⁾らの研究成果がある。また最近では、奈良県の「府

キーワード：名所，近代化，明治前期，京都，場所認識

県写真帖」や、「奈良名勝写真帖」について分析した三木理史¹¹⁾の研究成果や、近代都市史研究の視点から繁昌記に分析対象としての意義付けを試みた網島聖¹²⁾の成果があげられよう。これらは、主に明治後期以降の刊行物を分析の対象としており、本研究が扱う明治前期の刊行物について、詳しく言及したものはない。また、刊行物の内容の変化や、その社会的背景について、近世と近代との差異や連続性をめぐる議論は未だ着手されていないといえよう。

本研究が分析の対象としている京都については以下の研究成果があげられる。刊行された案内記類や地誌のうち、先述した『開化絵入京都見物独案内』など、『新選京都叢書』に収録されているものには、野間による「解題」が付けられている¹³⁾。それ以外で名所案内記や地誌を分析対象としたものは、管見の限りで工藤泰子¹⁴⁾による論考のみであった。工藤は、明治期の京都における観光政策の有り様を明らかにすることを目的とし、明治28(1895)年に開催された第4回内国勸業博覧会及び平安遷都千百年記念祭に合わせて京都市が編纂した名所案内記について検討している。しかし、ここでは民間によって刊行された商業ベースのものについてふれられておらず、また、開催前後の比較検討がなされていないなど、近代の京都における名所案内記の刊行動向とその社会的、ないし文化的背景やその文脈を考察するうえでは十分であるとはいえない。

また、近代京都における名所案内記の特徴について、近代史の立場からいくつかの資料を分析対象として、そこに叙述される「桜」に着目し、近代化やその表象について言及したのが高木博志¹⁵⁾であり、彼の研究成果は大変興味深いものである。ことに、高木は笠原一人¹⁶⁾の研究成果をふまえたうえで、明治期の刊行動向と特徴について、「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的

な連続性が強く、一つ一つが個性的な叙述であったのとは違い、1895年以降の観光ガイドブックは、量と種類は多いが内容の叙述がパターン化した」(下線部は筆者の加筆)と指摘している¹⁷⁾。しかし、高木論文では、これに関する具体的な事例が示されておらず、笠原の研究成果に依拠することを述べるに留めている。また、笠原論文においても、この指摘に関する刊行動向や、その特徴をめぐる詳細な検討はみられないことから、再考の余地があるように思われる。本稿では、この点について取り組むにあたっての前段階として、上記の高木論文の引用部分における下線部分をめぐって再考察を試みることにしたい。

明治前期の「京名所」をめぐる場所認識や編者のまなざし¹⁸⁾についての検証を進めるにあたっては、当時の京都が置かれていた社会的・文化的背景や、物質的な都市の近代化や風景の変容などに関する既存の研究成果¹⁹⁾を俯瞰することが重要となろう。そして、明治初期から府知事として京都の近代化を主導した横村正直きたがきくみち、また、山本覚馬やまもとかくまら京都府に奉職した知識人、郷土の篤志家たちの近代をめぐる思想と実践をめぐる研究成果²⁰⁾をおさえておくことも必要であろう。ここでは、明治前期の京都の状況と、同時期の名所旧跡について概観するに留めておきたい。

明治2(1869)年の東京奠都は、天皇という京都人の精神的支柱を失わせ、これまで「輦轂れんこくの余沢」と評された経済効果に大打撃を与えるなど、「京」ブランドや京都の価値を著しく低下させることとなった²¹⁾。明治8(1875)年の引裂上知は近世の名所地誌本²²⁾に数多く立項され、「京らしき」²³⁾として表象されてきた寺社の壮観な風景を破壊し、経済基盤を著しく衰退させる結果となった²⁴⁾。

明治初期において、横村正直ら開明派の官僚が推進した京都の近代化政策は、東京・大坂と並ぶ地位の保全、幕末の市中焼失以来、京都が衰退していく状況において、最良の打

開策として、また文化の発信源でありつづけるために手を尽くしたものとされている²⁵⁾。このような現状において、京都では実に多くの案内記類や地誌が編纂されていくのである。

元来、名所案内記は地誌の一形態と位置づけられてきた²⁶⁾。ことに、「場所」や「地理的知識」を取り扱う名所案内記や地誌という伝統的なメディアでは、新しく編纂するにあたり、場所や景物に関する叙述内容については、既存の内容をふまえることが慣習となっていた。したがって、名所案内記を研究対象とする場合にも、同時期の地誌に関する研究成果もふまえなければならない。そこで、近代における各地の地誌編纂の動きについてみた場合、例えば京都府下など行政の管轄区域に関する地誌編纂では、島津²⁷⁾や石田龍次郎²⁸⁾が指摘するように、政府によって明治初頭に開始された国家政策としての『皇国地誌』編纂事業との関係や、その影響を受けての実践であることが推察できよう。そして、行政によるこれらの地誌編纂事業の影響は、民間の書肆による地誌や名所案内記の編纂とその刊行事業へと波及したしたものとも考えられる。

また高木は、近代では古跡・名勝をめぐる「場所の物語」やその価値の評価と保存、顕彰と活用を取り巻く環境が、近世までとは別の意図を付加されていくようになると指摘する²⁹⁾。このように、名所案内記に叙述される名所や名勝をめぐる背景には、当時の京都がおかれた歴史的・社会的状況をはじめ、実に様々な要素が複雑に絡み合っている。そして、近代の名所研究を進めるにあたっては、中西僚太郎³⁰⁾や関戸明子³¹⁾らによって構築されつつある「名勝図」などの俯瞰図・鳥瞰図に関する研究成果³²⁾にも注視する必要があるものと思われるが、これらをふまえての検証は今後の課題の一つとしたい。

本稿では上記の点を鑑みつつ、明治前期に刊行された名所案内記を分析対象とし、近代

京都における名所研究を進めるにあたって、隣接分野においても共通する関心事項の一つとなっている、名所(名勝)として取りあげられる場所とその叙述内容の特徴について検証することを目的としたい。この検証作業を通じて得られた知見から、先行研究では検討されることのなかった、明治前期の京名所をめぐる場所認識や名所案内記の編纂という実践について、その様態や文化的コンテクストの一端を詳らかにすることで、本研究成果を名所研究における学際的な議論の俎上に乗せるとともに、近代京都における名所研究の進展に寄与できればと考える。

より具体的には以下2点について取り組む。第1に、明治期の名所案内記の叙述内容に対しての、高木による「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的な連続性が強く」という指摘について、個別具体的な名所案内記の検証から得られる知見に基づいて再検討を行うことである。本稿では、まずその前段階として明治期における案内記類や地誌といった地理的知識を取り扱う書籍全般についての刊行動向と、その特徴について検証する。

第2に、明治前期の京都で刊行された名所案内記について、次に示す複数の名所案内記の内容を比較しながら検証する。ここでは、名所案内記編纂者の名所へのまなざしに注目しつつ、明治前期における「京名所」をめぐる場所認識とその実践の様相について考察する。

取りあげる名所案内記の詳細は後述するが、検討する名所案内記の1つ目は、本稿で中心的な関心を寄せている明治18(1885)年刊行の『開化絵入京都見物独案内』である。本書については、冒頭で示した野間の指摘³³⁾にもあるように、明治前期京都の近代化にとまなう名所の変化を検証する上で、有益な資料であることは前述の通りである。その叙述内容に対する検証から、概ね明治10年から12

年の前半辺りの様相であると推測されるため、これとほぼ同時期に編纂・刊行された名所案内記と比較検討することで、当時の名所案内記に叙述される明治前期の京名所の表象の様態とその特徴の一端が明らかになるものとする。より具体的には、明治13(1880)年刊行の『花洛名所独案内記』、同年刊行の『京都名勝一覧図会』を分析の対象とする。

II. 明治期の京都で刊行された地理的知識を取り扱う書籍の刊行動向と分析対象

(1) 刊行動向の特徴とそのコンテキスト

明治期の京都における名所案内記の刊行動向と特徴について、高木が興味深い指摘しているのは先述の通りである³⁴⁾。この指摘は、近代京都の名所案内記や地誌の刊行動向、それらの系譜を考察しようとする際に極めて重要な指標となろう。本稿では、これに関する再検討を行うための前段階として、『京都出版史』³⁵⁾及び、京都府立総合資料館の所蔵目録である『京都府資料目録』³⁶⁾を用いて、明治期の京都において刊行された案内記類や地誌といった地理的知識を取り扱う書籍の刊行動向について整理した。

これらによると、明治期の京都において民間から刊行された書籍の総数は、少なくとも計10,069冊を確認できる³⁷⁾。このうち、案内記類³⁸⁾や地誌といった地理的知識を取り扱う書籍の刊行数は、計203冊を確認でき、これは近世を通じて刊行された名所地誌本の総数である計131冊よりも豊富であった。

表1は、上記のような地理的知識を取り扱うものについて、書籍名と叙述内容を精査して、案内記³⁹⁾、地誌⁴⁰⁾、写真帖、その他の書籍⁴¹⁾の4つに分類したものである。これによって、明治期におけるこの種の書籍の刊行動向とその特徴が把握できるものとする。

表1から明治期のこの種の書籍に関する刊行動向についてみた場合、少なくとも3つのピークがあるものと思われる。まず、計11冊

表1 明治期の京都で刊行された地理的知識やその情報を扱う書籍の刊行動向

西暦	明治	①	②	③	④	計
1868	1		1			1
1869	2				1	1
1870	3	1				1
1871	4	1				1
1872	5	2				2
1873	6	2				2
1876	9	4	1		3	8
1877	10	2	3		6	11
1878	11	3	1			4
1879	12		2			2
1880	13	3				3
1881	14	2	1			3
1882	15		6			6
1883	16	3	4			7
1884	17	2	3			5
1885	18	5				5
1886	19	1	1		1	3
1887	20	5				5
1888	21	1				1
1889	22	1	1			2
1890	23	2			1	3
1891	24	2	1			3
1892	25	2				2
1893	26	5	1		1	7
1894	27	3	2			5
1895	28	31	1	1	7	40
1896	29	3	3			6
1897	30	3	1		5	9
1898	31	3	2		1	6
1899	32	1				1
1900	33	1	2			3
1902	35		2			2
1903	36	7	4	4	2	17
1904	37		1			1
1907	40	2			1	3
1908	41	2		1	2	5
1909	42	2				2
1910	43	3		1		4
1911	44	3	1			4
1912	45	2	1		1	4
1868-1912	不明	1		3	1	5

注1) 京都出版史編集委員会編『京都出版史』京都出版史刊行会、1991、および京都府立総合資料館『京都府資料目録』京都府立総合資料館、1984を基に作成した。明治7(1874)年、明治8(1875)年、明治34(1901)年、明治38(1905)年、明治39(1906)年は該当書籍の刊行が認められないため本表から省いた。

注2) ①は案内記類、②は地誌類、③は写真帖、④はその他の書籍を示している。表中の空欄は該当書籍が無いことを示している。

が刊行された明治10 (1877) 年は、神戸－京都間の鉄道が開通し、七条停車場（ステーション）（現：京都駅）が開設された年である。次に、計40冊と最多の書籍が刊行された明治28 (1895) 年は、第4回内国勸業博覧会、平安遷都千百年記念祭の年であり、博覧会開催期間中の総入場者数は113万人を数えている⁴²⁾。これに合わせての平安神宮建造や時代祭の開始は周知の通りである⁴³⁾。そして、計17冊が刊行された明治36 (1903) 年は、京都市記念動物園（現：京都市動物園）が開園し、翌年3月に京都鉄道の二条駅が竣工、翌月には岡崎公園が開園している。刊行数の多さはこれらに合わせたものとも推察される。

明治期におけるこの種の刊行動向とその特徴は、鉄道の敷設が計画された時期であり、その開通時に合わせて多くの書籍が刊行されている他、博覧会や記念祭といった大規模なイベントが企画・開催された時期でもある。また、寺社の法要やご開帳、これまでには無かった新しい場所（例えば、動物園など）が一般民衆に解放されるなどして注目を集め、多くの観光客が見込まれる時に、盛んに企画（編纂）・刊行されていることがわかる。ことに、地理的知識を取り扱う書籍のうち、名所や名勝といった訪れる対象となる場所の知識や情報に特化している「名所案内記」や、買い物や飲食に便の良い工商案内に関するものが盛んに刊行されているようである。

また、表1からは、明治期において地誌が継続的に刊行されることがわかる。これは、近世にはみられなかった特徴の一つである⁴⁴⁾。ことに、明治9 (1876) 年から10年代半ばには地誌の刊行が盛んであることがよみとれる。紙幅が限られているため、地誌の刊行をめぐる詳細な検証については別稿とし、ここでは概観に留めたい。この時期、『京都府管内地理問答』など地理教育に関する問題集⁴⁵⁾や、「京都府管内」を表題に冠した地誌が多いわけだが、この社会的背景の一つには、明

治9年の京都府管轄領域の確定が関係しているよう。

今一つには、先述したように中央官庁によって明治初頭に開始された国家政策としての『皇国地誌』編纂との関係があろう。明治14 (1881) 年に京都府に設置された調査掛編輯部の職員で編集担当の一人であった水茎玉菜⁴⁶⁾が、明治17 (1884) 年に大黒屋から『山城地理誌』を刊行していることは、明治期の地理的知識をめぐる書籍の編纂とその出版動向を検証するうえで大変興味深い。また、このような京都府の管轄領域確定とそれに伴う地誌編纂事業⁴⁷⁾や皇国地誌の編纂という行政主導の編纂事業と、京都における民間レベルでの地誌出版が盛んに行われる時期が一致することは注視すべきことであろう⁴⁸⁾。

次に、明治期に刊行された書籍の体裁に関する特徴は以下の通りである⁴⁹⁾。まず、明治初期から中期あたりまでのものには、例えば、近世後期に刊行された『都名所図会』のような、近世に多くみられた「半紙本」（天地約24cm×左右約16～17cm）は少ないようである。明治期の刊行物は、近世では「中本」（約19cm×約13cm）や、「小本」（約17cm×約12cm）と分類されるものが多いといえる⁵⁰⁾。もしくは、「懐中本」や「袖中本」と称される旅先での利便性の良い小型のものが多く、1冊で完結され、頁数（丁数）の少ないものが目立つ。管見の限りで最小の案内記は、明治13 (1880) 年に刊行された川勝徳次郎『花洛名所独案内記』⁵¹⁾（5.2cm×12.5cm, 41丁）であった。これについては次章で詳しく扱うこととしたい。

しかし、小型の体裁で刊行されたものが多いのは、明治期以降の特徴であるとは言い切れない。というのも、小型の体裁での編纂は山近博義が指摘するように、例えば池田東籬^{とうり}の作品など、幕末の京で刊行された名所案内記にも共通する特徴の一つである⁵²⁾。明治中頃までに刊行された小型の案内記類や地誌に

表2 明治10年代の京都において刊行された名所案内記の一覧

西暦	明治	書名	編者	発行元	体裁(cm)	頁数
1877	10	京都名所巡覧記	福富正水	村上勘兵衛	12×17	80丁
1880	13	花洛名所独案内記	川勝徳次郎	川勝徳次郎	5.2×12.5	41丁
		京都名勝一覧図会	橋本澄月	風月堂	12×17	63丁
		京都名所道案内	岡本光憲	山田久	7×16	27丁
1881	14	京都名所案内図会	遠藤茂平	正宝堂	9×13・2冊	—
1883	16	三府名所独案内図会	馬場文英	細川開益堂	9×13・4冊	167丁
1884	17	京都名所めぐり	石田才次郎	石田才次郎	9×13	91丁
		今世京羽二重	石田静次郎	石田有年	6×13	72丁
1885	18	京都名所独案内	樺井達之輔	風月庄左衛門	—	1折
		開化絵入京都見物独案内	文字富之助	片岡賢三	8×16	33丁
1886	19	平安名所案内	舟橋治平	舟橋治平	6×13	72丁

注 京都出版史編集委員会編『京都出版史』京都出版史刊行会、1991、および京都府立総合資料館編『京都府資料目録』京都府立総合資料館、1984を基に作成した。

関しては、幕末以来の一種の慣習ともいえる所作に基づいて編纂されたものとみるべきであろう。つまり、これらの書籍の刊行動向とその特徴は、幕末の延長線上にそのまま位置づけられるだろう。

(2) 分析の対象

表2は、明治10年代の京都で刊行された名所案内記の一覧である。書名や内容について精査すると、少なくとも計11冊の刊行が確認できる。本稿では、先述のように『開化絵入京都見物独案内』、『花洛名所独案内記』、『京都名勝一覧図会』という3冊の案内記をとりあげ、刊行の状況などの基本的な情報を整理していく。この3冊の名所案内記を分析対象とするのは以下の理由からである。

野間が指摘するように、『開化絵入京都見物独案内』が刊行された明治18(1885)年は、琵琶湖疎水工事が着工された年であり、京都が近代化への道を歩む新しい息吹を伴った雰囲気をもった時期である⁵³⁾。明治の新名所が取りあげられている本書は、明治前期の京都を考察するにあたり有益な資料であることは先述の通りである。また本書は、明治16

(1883)年に刊行され、商工物案内としては初めて詳細な挿絵が付けられた石田有年による『都の魁』とともに、この時期の京都を代表する案内記として評価されている⁵⁴⁾。その内容は、近世的な要素のなかに近代的な新しい要素が色濃く反映されていることがわかり、近世との連続性や叙述内容の変化を考察するにあたって格好の資料といえよう。

次に、『花洛名所独案内記』は、管見の限りでは最も小型サイズの名所案内記であり、挿絵も確認できる。京都府立総合資料館所蔵のものは、明治24(1891)年の再版が確認でき、本書の需要が高かったことが確認できる。幕末以来の特徴である小型の名所案内記として編纂された本書は、高木の指摘について考察するにあたり有益な資料の一つといえよう。

『京都名勝一覧図会』は、近世の代表的な名所案内記である『都名所図会』を強く意識しており、同書に付けられた凡例から当時の需要に合うような明治版の『都名所図会』の編纂を目指したことが推察できる。このことは、『都名所図会』が刊行から100年程経過した明治期においても強い影響力を有していた

といえる一方で、本書が明治期の叙述内容に対する近世との連続性を考えるうえで大変興味深い資料となりえることを示していよう。

各書籍の分析方法については以下のように進めていく。

まず、編纂や刊行の目的に関する記述を見だし、その意図について考察する。次いで、取りあげられた場所について、その叙述内容や掲載されている挿絵から特徴を明らかにしていく。さらに、そこに取りあげられている場所や挿絵について、編者が名所として取りあげた理由（注目すべき事象や、伝承する場所の物語といったもの）を明らかにする。そこで取りあげられている場所について、記述内容や描かれる風景を精査し、そこで語られる由緒や場所の物語について、「寺社」、「古跡」、「祭礼・風俗」、「商業・店舗」⁵⁵⁾、「産業・工業」⁵⁶⁾、「交通」⁵⁷⁾、「その他」という7つに分類し、そこに含まれる項目数と全体に占める割合を求めた。

各名所で語られる時期について、古代から江戸時代までの物語や事象に関するものと判断できるもの場合は「前近代」、明治維新以降に由来する場所の物語や事象に重きを置いていると判断できるものを「近代」と区分する。また、場所の叙述内容のなかに、前近代と近代の叙述の両方がみられる場合では、そこに取りあげられている割合が高いと判断できる方に区分した。

次章では、上記の検証方法にしたがって、それぞれの名所案内記の特徴と、そこで紹介される京名所の特徴や様態について考察する。

Ⅲ. 明治10年代の名所案内記の特徴

(1) 『開化絵入京都見物独案内』について

『開化絵入京都見物独案内』⁵⁸⁾は、文字富之助が編纂し、明治18(1885)年に片岡賢三によって刊行された名所案内記である。本書の体裁は、天地8cm×左右16cm、全33丁からなり、近世の分類で考えた場合、懐中本や袖

中本といった小型の案内記に分類できよう。本書の挿絵は銅版画で計38図が確認でき、表題に「絵入」とあるように「開化期の新名所」を中心として挿絵を強調するものとなっている。

裏表紙に書かれている本書の出版に関する情報を整理する。これをみると、「明治十七年十二月五日出版御届 同十八年三月出版販売十六銭」⁵⁹⁾とある。これに続いて、編纂者の文字富之助、出版人の片岡賢三の氏名と所在地（住所）が、次に発売所が示されている。ここには、京都の発売所であった5名の主人の名と所在地の後に、大阪での1ヶ所、東京での1ヶ所、さらに「組合刊行大発売所長寿堂」が紹介されている。この計8ヶ所が、本書を16銭で発売していたことがわかる。次に、以下の引用文から編者の刊行意図が読み取れる。

「京都名所社寺古跡著述の数多ありと雖えども、此如き一小冊に尽くすへきにあらず。只大冊の懐宝に便ならざるを厭い、茲に其大略を抄記するのみ。明治庚申の二月 編者」⁶⁰⁾

ここに示されている「明治庚申の二月」とは、明治13(1880)年を指し、京都には名所や寺社、古跡に関する著述が数多くあるが、小冊の案内記では書き尽くせず、大冊では不便であり、懐中に便の良い小冊の体裁にするにあたり大略抄記で編纂した意図が読み取れる。

次に、この小冊の名所案内記に立項される場所の叙述内容の傾向と特徴、そして、本書が編纂された時期について考察していく。本書には、まず「京都見物独案内方位図」と題された都市図が掲載され、次いで「三条大橋ヨリ凡道添付」と題された目録が付けられている。本書における名所の紹介は、起点となっている「三条大橋」の挿絵と叙述（解

表3 『開化絵入京都見物独案内』に立項されている場所とその行程

行程
[1]三條大橋(●) → [2]新京極通 → [3]御所(●) → [4]仙洞御旧院(*1) [5]大宮御旧院博覧会(*2) → [6]相国寺(*3) → [7]上御霊社 → [8]下加茂社(●) → [9]山はな-料理屋平八 → [10]下御茶屋 → [11]修学院上御茶屋(*4) → [12]寂光院 → [13]証迦阿弥陀(勝林寺) → [14]北岩倉-大雲寺 → [15]鞍馬寺 → [16]貴布弥社 → [17]上加茂神社(●) → [18]今宮社 → [19]大徳寺 → [20]建勲神社* → [21]金閣寺(●) → [22]平野神社 → [23]北野神社(●) → [24]等持院 → [25]竜安寺 → [26]御室(●) → [27]妙心寺(●) → [28]高雄山(神護寺) → [29]護王神社 → [30]月輪寺 → [31]愛宕山 → [32]釈迦堂清涼寺 → [33]天竜寺 → [34]嵐山(●) → [35]法輪寺 → [36]松尾神社 → [37]月読社 → [37]梅ノ宮神社(●) → [38]桂川ノ鉄橋 [39]大原野神社 [40]花ノ寺-勝持寺- [41]西岩倉-金蔵寺- [42]三鈷寺 [43]粟生光明寺 [44]善峯寺 [45]柳谷 [46]向日神社 [47]長岡天満宮 [48]宝寺-宝積寺- [49]天王山 [50]離宮八幡社 [51]山崎ステーション → [52]男山神社 → [53]伏見駅 [54]桃山 [55]宇治平等院 [56]興聖寺 [57]三室戸寺 [58]黄檗山 [59]日野薬師 [60]醍醐寺 [61]勧修寺 [62]花山元慶寺 [63]御香宮 [64]藤の森社(●) [65]稲荷神社(●) → [66]東福寺 → [67]泉涌寺 → [68]新熊野観音 → [69]三十三間堂(●) → [70]豊国神社* [71]大仏方広寺(●) [72]耳塚(●) [73]歌中山清閑寺 [74]西大谷(●) → [75]清水寺(●) → [76]八坂塔-宝観寺 → [77]壺鷺山-正法寺 → [78]双林寺 → [79]東大谷 → [80]長楽寺 → [81]円山 → [82]知恩院(●) → [83]八坂の神社(●) → [84]南禅寺 → [85]永観堂 → [86]黒谷-金戒光明寺-(●) → [87]真如堂 → [88]吉田社(●) → [89]銀閣寺(●) → [90]詩仙堂 → [91]百万遍 [92]療病院* → [93]舎密局(●) → [94]織工場(●) → [95]勧業場(●) → [96]革堂 → [97]下御霊社 → [98]中学校 → [99]二条御城京都府(●) → [100]本願寺(●) → [101]大教講堂(●) → [102]停車場-ステーション-(●) → [103]東本願寺(●) → [104]六角堂(●) → [105]四条鉄橋(●) [106]建仁寺 → [107]六波羅蜜寺 → [108]安井金比羅

注1) 表中の(●)は挿絵がみられる項目を示し、→は項目の最後に次の名所への行程(距離)が記載されている場所を示している。

注2) 立項されている名所の内容と挿絵に差異がみられる場所は、(*)として示している。なお、ここに掲載されている挿絵には、次の標題が付けられていた。(*1)仙洞御庭(*2)大宮御所(*3)東征戦亡之碑文(*4)修学院離宮。また、健勲神社・豊国神社・療病院に示した*は、建設中であることを示している。

説)に始まり、ここには計108ヶ所の名所が取りあげられている。

本書で立項されている名所の多くは、叙述の最後に「〇〇へ〇丁(里)」というように、次の場所までの距離が示されており、名所廻りのルート(行程)がある程度意識された構成となっているようである(表3)。その行程は、起点の三条大橋から概ね一筆書きで反時計回りに設定されていることがわかる。これは、山近⁶¹⁾が指摘するように、幕末に刊行された池田東籬の名所案内記にみられる行程の特徴とほぼ一致するものといえる。

名所とされる理由(場所の物語や挿絵の特徴)について考察するにあたり、前章2節で先述したように、叙述内容を7つに分類したものが表4である。これをみると、前近代の記述によっている場所は、本文で89ヶ所(82.4%)、挿絵では26図(68.4%)を確認でき

る。

ここにあげられている場所、描かれている場所のほとんどが寺社であった。この寺社が占める割合は、『都名所図会』や池田東籬の作品群など近世以来のものとは変わらない⁶²⁾。また、表3をみると、近世の名所案内記には必ず掲載されていた「島原」などの代表的な

表4 『開化絵入京都見物独案内』で紹介されている項目における記述内容の分類

	時期	総数	A	B	C	D	E	F	G
挿絵	前近代	26	22	2	0	0	0	1	1
	近代	12	1	4	0	0	3	2	2
本文	前近代	89	82	4	0	1	0	1	1
	近代	19	3	4	0	1	4	4	3

注1) 前近代と近代の境界は、明治維新とする。

注2) 表中のアルファベットは、(A)寺社、(B)古跡、(C)祭礼・風俗、(D)商業・店舗、(E)産業・工業、(F)交通、(G)その他を示している。

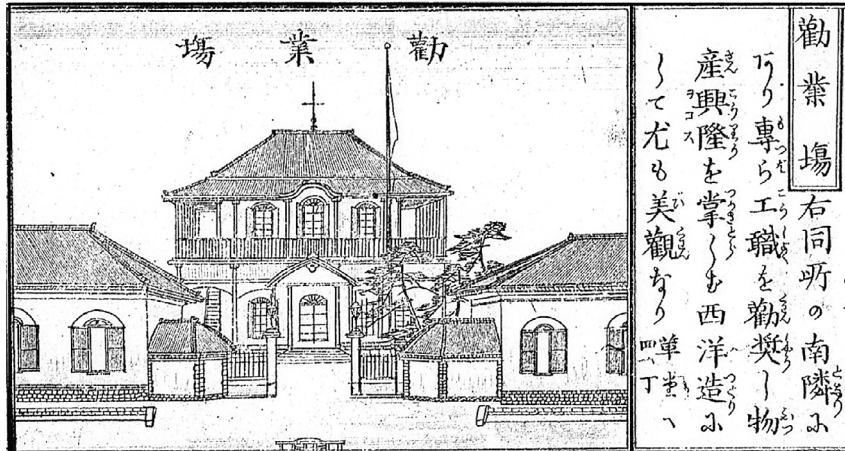


図1 『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている勸業場

出典) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三、明治18(1885)年刊、28頁、京都府立総合資料館所蔵。

京都の風俗や、「祇園会」といった祭礼は、まったく取りあげられていない。そして、有名な茶屋や西陣といった伝統産業についても触れられていない。ここで唯一取りあげられている修学院村の「山ばな」(平八茶屋)を除き、名所案内記に祭礼や風俗、商業、工業に関する場所の立項や叙述がみられないのは大変興味深い特徴であるといえよう。

転じて、本書は「開化」と題されるように、明治以降に創られた「新名所」が取りあげられていることは先述の通りである。また、近世から名所として名所案内記に取りあげられてきた場所の中には、明治維新以降に起こった物語や事象によって名所として認識されているものと、近世的な叙述の中に近代の事象が新たに加筆されている箇所がみられる。本書では、これらを合わせて本文で19ヶ所、挿絵で12図を確認できる。そこで次に、これらの特徴について考察していく。

表3のうち明治期に新たに創られた場所は、例えば、「新京極通」(2)⁶³⁾や「建勲神社」(20)などをはじめとする計13ヶ所を確認できる。ここでは、明治10年代に府知事榎村正直が主導した「近代(西洋)的な工場」の他に、中

学校や本願寺の大教講堂(現:龍谷大学)といった「煉瓦造りの学校」、そして、山崎ステーションや七条停車場(現:京都駅)や、桂川や四条の「鉄橋」といった鉄道に関する場所が名所として紹介されている。つまり、この「新名所」とは、一つには、開化や近代化のシンボルとしての場所であったといえよう。また、織田信長を主祭神として新造された「建勲神社」(明治13年9月奉迎)、豊臣秀吉を祀った「豊国神社」(同5月竣工)が建造中ながら新名所に加えられており、本書の編纂時期を考えるうえでも大変興味深い。

近代に新築された「勸業場」(95)(図1)の叙述についてみてみよう。ここでは、勸業場とは工織を勸奨し、物産興隆を掌握する場所であると解説している。そして、挿絵にもあるように「西洋造りにして尤も美観なり」という建物の外観の様子が示されている。この「尤も美観」という表現は、「頗る美観」(中学校、停車場など)や、「壮麗」(四条鉄橋)など、明治前期に建造された西洋造りの建造物に共通する表現の一つであった。対して、前近代から立項されている場所では、例えば「相国寺」(6)(図2)に、「(前略)禅宗

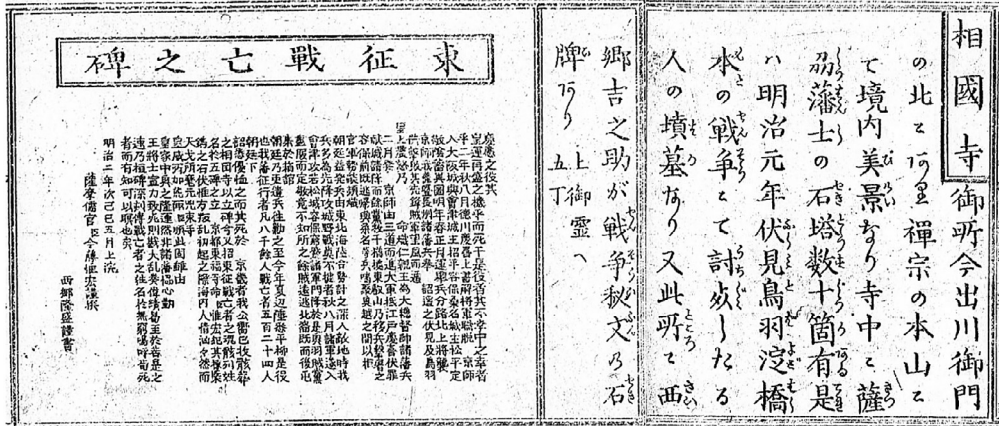


図2 『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている相国寺

出典) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三, 明治18 (1885) 年刊, 4 頁, 京都府立総合資料館所蔵。

の本山にて境内美景なり…⁶⁴⁾とあるような、極まれに庭園の様子などに限って用いられた事例を除くと、ほとんどみられない表現であったといえる。つまり、この「頗る美観」というような強調した美的表現は、近代建築に優先的に与えられた表現方法と考えることができる。

続いて、近世から名所として立項されてきた場所ながら、その叙述内容が近代以降の事象に変更、もしくは、それが加筆されている場所について検討する。ここでは、「御所」(3) や「相国寺」(6) など計6ヶ所が確認できる。「相国寺」(6) (図2) の事例では、近世の名所案内記に多くみられた開基や寺歴についてではなく、寺中にある明治元 (1868) 年の鳥羽伏見の戦いによる戦死者の墳墓と、西郷吉之助が作らせた碑文という、明治維新以降の事象で紹介されている。挿絵についても、これまでの相国寺の境内の様子といったものではなく「東征戦亡之碑」となっている。この背景の一つには、西郷吉之助が維新創業の元勳として有名であり、幕末には相国寺が薩摩藩の藩邸とされたことに関係することは想像に難くないだろう。

この他に、大宮御所の解説では、博覧会会

場として利用されているという記述に変更され、二条城では、離宮となった後に、京都府の庁舎として転用されていることが加筆され、伏見駅では鎮台に関する記述が加筆されている。また、「御所」(3) は、近世後期にはすでに名所化されていたが⁶⁵⁾、本書では御苑として整備された後の叙述となっていることがわかる。

挿絵に描かれる名所空間とその視点の関係をみると、例えば、『都名所図会』にあったような全景を客観的に俯瞰する構図とも⁶⁶⁾、あるいは、19世紀初めの『都百景』に代表される、誇張された浮世絵の構図とも異なっている。むしろ、図1からもわかるように、本書の挿絵は、風景写真に近い特徴をみだせる。この風景写真との構図の類似性については、当時既に刊行済みであったとされる『京都名所撮影』という写真帖に注目してみたい⁶⁷⁾。これは、明治前期に京都の桑田清新堂から発売されたと考えられており⁶⁸⁾、日本語での表題の他に、「JAPAN KIYOTOMEISHO PHOTOGRAPHER」という英語表記があることから、外国人用の土産物として発売されたものであろう。この写真帖と『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている挿絵を比較し

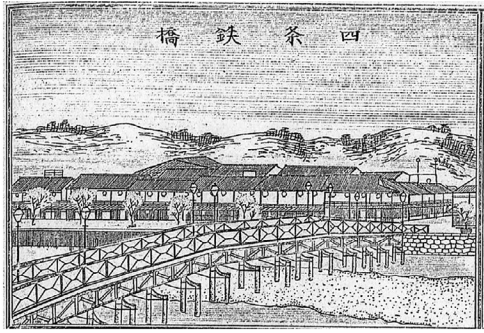


図3 『開化絵入京都見物独案内』に掲載されている「四条鉄橋」

出典) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三、明治18(1885)年刊、32頁、京都府立総合資料館所蔵。

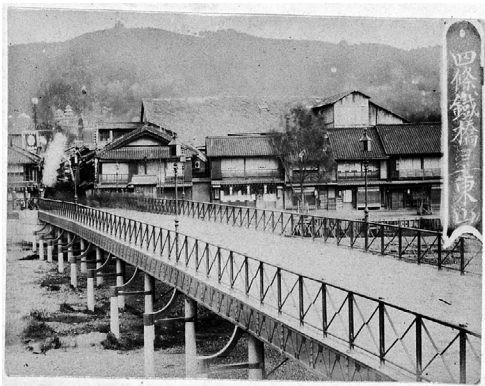


図4 『京都名所撮影』に掲載されている「四条鉄橋ヨリ東山」

出典) 『京都名所撮影』桑名清新堂、発行年不明、国際日本文化研究センター所蔵(京都名所撮影データベース) <http://www.nichibun.ac.jp/meisyozyue/satsuei/c-pg8.html> (最終閲覧日2012年8月19日)

た場合、写真帖に掲載されている場所は、「新京極」を除くと、本書において挿絵が掲載されている場所と一致する。その構図は、例えば「四条鉄橋」(105)(図3、図4)のように、構図が左右反転となっているものも確認できるが、対象とする景物や場所、その構図の方位や視点などに共通する特徴が実に多くある。

最後に、本書が編纂された時期について考

察する。跋文の年記は明治13(1880)年であり、刊行される数年前には編纂を始めていたようである。本書に取りあげられている場所の叙述内容を確認していくと、例えば「本願寺」の項目に示される大教講堂の記述に、「(前略)又門前に新築大教講堂あり 西洋造りにして頗る美なり 明治十二年五月三日開業式 此日数万観人群集す」⁶⁹⁾とあり、この明治12(1879)年5月という年記が、本書の刊行年に最も近いものであった。明治10(1877)年に建築が始まった建勲神社と、豊国神社は明治13年に落成しているが、本書では竣工間近という記述になっている。また、舎密局は、明治14(1881)年に北垣国道によって民間に払い下げられており、明治17(1884)年には別の用途に変わっている⁷⁰⁾。本書では、払い下げ以前の様子で立項されていることから、編纂がそれ以前に行われたものと推測できる。そして、前述した写真帖は明治13年の時点で手にいれることが可能であり、編者が目にしたことも十分にあり得る。したがって、本書に示されている京都の様相とその編纂時期は、明治10年から12年後半あたりまでの事象や景物ということとなり、本書の編纂はこの頃に行われた可能性を指摘できよう⁷¹⁾。

(2) 『花洛名所独案内記』について

『花洛名所独案内記』⁷²⁾は、川勝徳次郎が編纂、明治13(1880)年に刊行した名所案内記である。京都府立総合資料館所蔵本の奥書には、「明治十三年七月 出版御届 同年同月 彫成発行 明治二十四年再版」⁷³⁾とあり、初版刊行時には未開通であった、東京ー神戸間など主要な汽車の発着時刻表⁷⁴⁾が最後尾に追加されている。

初版の体裁は、天地が5.2cm×左右12.5cm、全41丁と小型であり、懐中を意識したものとなっている。再版である本書には、序文や凡例は付されておらず、表紙を開くと、「三條大橋ヨリ諸方道法附」と題された目録が付け

表5 『花洛名所独案内記』に立項されている場所とその行程

行程	
[1]	三條大橋 (●) → [2] 新京極 → [3] 御所 (●) [4] 仙洞御旧院 [5] 大宮旧御所博覧会 → [6] 相国寺 → [7] 上御霊 → [8] 下鴨 (●) → [9] 山ばな → [10] 下御茶や → [11] 同上-修学院上茶屋- (●) → [12] 寂光院 → [13] 証コ阿弥陀 → [14] 北岩倉 → [15] 鞍馬 → [16] 貴布祢社 [17] 上賀茂神社 (●) → [18] 今宮社 → [19] 大徳寺 (●) → [20] 建勲神社* → [21] 金閣寺 (●) → [22] 平野神社 (●) → [23] 北野神社 (●) → [24] 等持院 → [25] 龍安寺 → [26] 御室 (●) → [27] 妙心寺 → [28] 高雄山 (●) → [29] 護王神社 [30] 梅尾山 → [31] 槇尾山 → [32] 月輪寺 → [33] 愛宕神社 (●) → [34] 釈迦堂清涼寺 → [35] 天龍寺 [36] 嵐山 (●) → [37] 法輪寺 → [38] 松尾神社 (●) → [39] 月読寺 → [40] 梅ノ宮 → [41] 紙すきば → [42] 桂川ノ鉄橋 [43] 大原野神社 [44] 花ノ寺 [45] 西岩倉 [46] 三鈷寺 [47] 粟生光明寺 [48] 善峯寺 [49] 柳谷 [50] 向日神社 [51] 長岡天満宮 (●) [52] 宝寺 [53] 天王山 [54] 離宮八幡社 [55] 山崎ステーション → [56] 男山神社 → [57] 伏見駅 [58] 桃山 [59] 宇治平等院 (●) [60] 興聖寺 [61] 三室戸寺 [62] 黄檗山 (●) [63] 日野薬師 [64] 醍醐寺 [65] 三宝院 [66] 勧修寺 [67] 花山元応寺 [68] 御香宮 [69] 藤の森社 (●) [70] 伏見稲荷社 (●) → [71] 東福寺 → [72] 泉涌寺 → [73] 新熊野観音 → [74] 三十三間堂 (●) → [75] 豊国神社* [76] 大仏方広寺 [77] 耳塚 (●) [78] 歌山清閑寺 → [79] 西大谷 → [80] 清水寺 (●) → [81] 八坂の塔 → [82] 霊鷲山 → [83] 高台寺 → [84] 双林寺 → [85] 東大谷 → [86] 長楽寺 → [87] 丸山 → [88] 智恩院 (●) → [89] 八坂ノ神社 (●) → [90] 南禅寺 → [91] 永観堂 → [92] 若王子神社 → [93] 黒谷 (●) → [94] 真如堂 → [95] 吉田社 → [96] 銀閣寺 (●) → [97] 詩仙堂 → [98] 百万遍 [99] 療病院* → [100] 舎密局 (●) → [101] 織工場 → [102] 勸業場 (●) → [103] 革堂 → [104] 下御霊 → [105] 中学校 (●) → [106] 二条城京都府 (●) → [107] 島原郭 → [108] 東寺 → [109] 本願寺 (●) → [110] 大教講堂 → [111] 停車場 (●) → [112] 東本願寺 (●) → [113] 六角堂 (●) → [114] 誓願寺 → [115] 四条鉄橋 (●) → [116] 建仁寺 → [117] 六波羅蜜寺 → [118] (安井金比羅?)

注1) 表中の (●) は挿絵の挿入がみられる項目を指し、→ は項目の最後に次の名所への行程(距離)が記載されている場所を示している。また、建勲神社・豊国神社・療病院の*は、建設中であることを示している。

注2) 安井金比羅は、総目録には記載されているが本文中ではみられないため、ここでは(?)とした。

られており、ここには本書に立項されている計107ヶ所の名称と、起点である三条大橋からの距離が示されている。本文では、「三条大橋」についての解説とその挿絵の掲載に始まり、本書を通じて計118ヶ所の立項と、計31図の銅版画と推測される挿絵を確認できる⁷⁵⁾(表5)。前節の、『開化絵入京都見物独案内』と同様、『花洛名所独案内記』で紹介される場所の多くは、まず所在地が示され、次に由緒や歴史、もしくは注目すべき事象が記述されている。そして、最後に次の項目までの距離が示されており、名所廻りの行程がある程度意識された構成となっている。

本書において名所として取りあげられる理由(場所の物語や挿絵の特徴)について考察するにあたり、前章2節で述べたように、紹介されている項目で語られている内容とその時期について7つに分類したものが表6である。これによると、前近代の記述によって名所として立項されている場所は、本文では計

95ヶ所(80.5%)、挿絵では計24図(77.4%)を確認できる。本書では、近世において「京都らしさ」を表象していた祭礼や風俗といった事象や景物に関する場所は「島原郭」(107)⁷⁶⁾のみである。ここでは、寛永18(1641)年に遊里が柳馬場から移転したことと、吉例となっていた3月21日の菜種の道中と称されていた太夫による郭の練り歩きについての記述がみられる。太夫の行列は実に美観であった

表6 『花洛名所独案内記』で紹介されている項目における記述内容の分類

	時期	総数	A	B	C	D	E	F	G
挿絵	前近代	24	20	2	0	0	0	1	1
	近代	7	0	2	0	0	1	2	2
本文	前近代	95	88	4	1	1	0	1	0
	近代	23	6	4	0	1	4	5	3

注1) 前近代と近代の境界は、明治維新とする。

注2) 表中のアルファベットは、(A) 寺社、(B) 古跡、(C) 祭礼・風俗、(D) 商業・店舗、(E) 産業・工業、(F) 交通、(G) その他を示している。

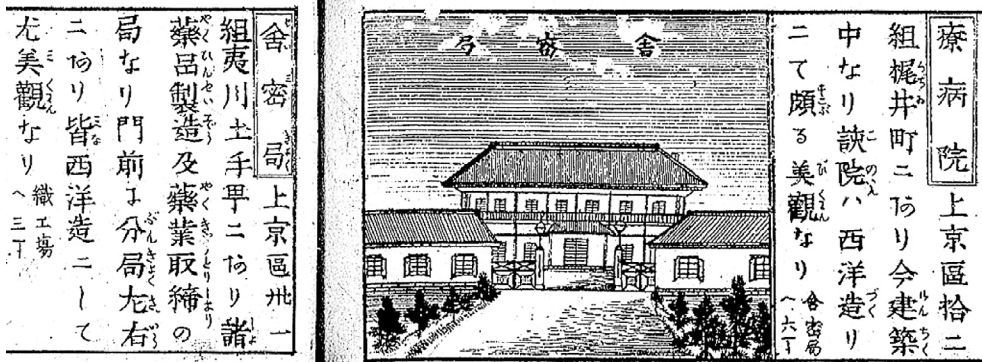


図5 『花洛名所独案内記』に掲載されている療病院

出典) 川勝徳次郎『花洛名所独案内記』明治24(1891)年
 (初版 明治13(1880)年刊), 34頁, 京都府立総合資料館所蔵

ことを懐古し、「當月日不定なり」とその現状が付け加えられている。

そして本書において、大店やその他の商業、伝統産業に関する記述がみられる場所は、「山ばな」(9)のみとあってよい。これは、茶屋平八の名物である麦飯とろろ汁と、高野川で捕れる川魚について記述したもので、『開化絵入京都見物独案内』と共通している。つまり、本書でも、前近代の事象に由来する場所の大半は寺社であり、近世以来の伝統的な京都の祭礼や風俗、商業や伝統産業に関する場所や景物は、ほとんど取りあげられていない。

次に、近代の事象に由来する名所について考察していく。これに該当する場所は本文では計23ヶ所(19.5%)、挿絵で計7図(22.6%)を確認できる。このうち、明治期に創出された場所は、例えば「新京極」(2)、「建勲神社」(20)など計13ヶ所を確認でき、なかでも「建勲神社」, 「豊国神社」(75), 「療病院」(99)(図3)については、本書編纂時にはまだ建築中であつたことがわかる。前節の事例もそうであつたように、近世では編纂当時に建築中であつた場所が名所案内記に名所として取りあげられた事例は、管見の限りではなかつたことであり、明治期における新しい特徴の

一つであるといえよう。

これらのうち「療病院」(図5)を事例として叙述内容をみてみよう。ここでは、まず建設中の所在地が示され、「西洋造りで美観」という名所としての理由が述べられている。また、「四条鉄橋」(115)(図6)では、「都て鉄造ニして橋上ニ紅白硝子燈を立」とあるように、何が壮麗であるのかがより詳しく示されている。このように本書においても、明治以降に創られた場所の多くが、「美観」, 「壮麗」などの表現で語られていることは大変興味深い。

記述内容が近代の事象に変更、もしくは加筆された場所は、「御所」(3)や「相国寺」(6)など計9ヶ所が確認できる。例えば、「霊鷲山」(82)では、寺の開基と阿国上人所縁の愛宕興正寺廟の新築について述べた後に、勤王戦死者の招魂墓があることが追記されていた。また、「誓願寺」(114)では、同じく寺の開基と什物について述べられた後に、割字で新京極通の話題にふれている。そして、本書に取りあげられている京都の様相とその編纂時期については、本願寺や療病院などの叙述から、明治10年後半から12年後半頃までの景物が中心となっており、その編纂時期は先述したように、取りあげられている京都の景物

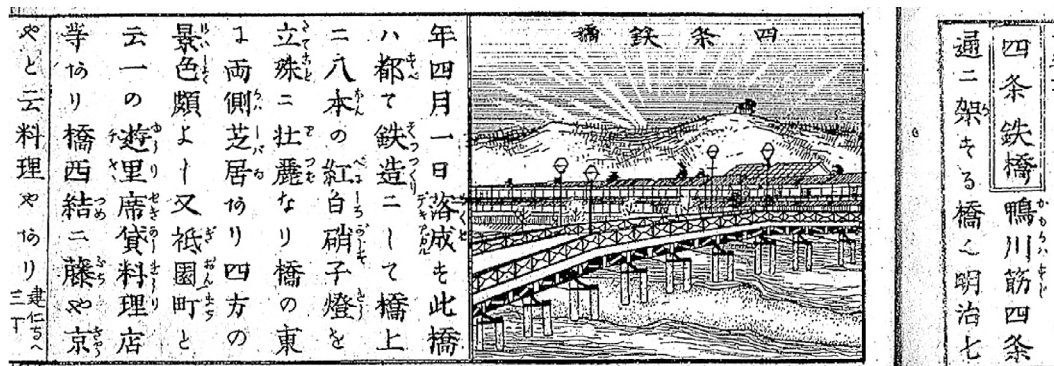


図6 『花洛名所独案内記』に掲載されている四条鉄橋

出典) 川勝徳次郎『花洛名所独案内記』明治24(1891)年
(初版 明治13(1880)年刊), 40-41頁, 京都府立総合資料館所蔵

と刊行年に数年のひらきが認められる『開化絵入京都見物独案内』とは異なり、本書は編纂してまもなく刊行されたことが指摘できよう。

最後に、本書では、次の名所までの行程(「道法」)が示されていることは先述の通りである。しかし、京都御苑内など、次の場所が同じ敷地の場合などでは行程はみられない。また、「大原野神社」(43)から「山崎ステーション」(55)までの地域と、「伏見駅」(57)から「伏見稲荷神社」(70)までの地域では、ある程度の規則的な配置は推測できるが次の行程が明確にはなっていない。その背景の一つとしては、「山崎ステーション」と「伏見駅」の叙述に宿が多いことが述べられていることから、編者は京都郊外の外泊を必要とする場所では、交通の便が良くその地域の起点となりえる場所を提示するに留め、利用する旅人個人の興味関心によって選択的に名所廻りをできるような編纂を行った可能性があることが指摘できるのではないだろうか。しかし、これらに対する明確な回答については今後の成果をまちたい。

(3) 『京都名勝一覧図会』について

『京都名勝一覧図会』は⁷⁷⁾、橋本澄月が編

纂し、明治13(1880)年に風月堂から刊行された名所案内記で、天地12cm×左右17cm、全63丁の小型の体裁となっている。ここに掲載された地図や挿絵の一部には彩色が施されており、特徴的な1冊となっている。

刊行の年記に関する情報をみると、奥書に「明治十三年七月二十三日版權御願 同八月十九日版權免許 同年十月刻成」⁷⁸⁾とある他、凡例に「明治十三年秋日」とあり、編纂後まもなく刊行されたことが推察される。編者の編纂意図は、以下の引用文にみることでできよう。

「一(前略)神社の芳境仏閣の佳色山川の美観等自今の風景を模写し旧名勝図会に基附遺漏を巡歴し幼童の輩座して古跡の勝地を見ることを肝要とす

一 文語は都名所図会の記書を種とし旧地其の委きの大意を撰書すに故其示らす」⁷⁹⁾

ここに示された「都名所図会の旧書」とは、秋里籬島編『都名所図会』を示しており、本書はこれを種本としていることがわかる。『都名所図会』の挿絵の構図に関する凡例⁸⁰⁾は本書にみられないが、それ以外では

両書の凡例の記述はほぼ一致している。表題とする『京都名勝一覧図会』も、「都名所図会」を意識したものであり、当時代の需要に合うような明治版の『都名所図会』の編纂を目指したことが本書に付けられた凡例からわかる。

本書は表7に示すように、本文中の標題によって、①から⑦までに区分され、ここに取りあげられる場所や事象は計347項目にわたり、①には計13図の地図の掲載も確認できる。そして、②以降において、「名勝」として取りあげられる場所は計233ヶ所、挿絵に描かれている場所は64ヶ所（計65図）にのぼっており、ここに示されている名勝の項目数は先の2つの案内記の2倍近い数であることがわかる。本書に掲載されている地図については、まず「京都名勝方位案内」では、市中と郊外が彩色によって区分されているほか、名称や河川などに彩色がみられた。次いで、「洛中名勝方位」では、下京の名勝が図示されている。また、「伏見市中」では、第1区から第4区までの区画毎に塗り分けられている。そして、京都の郊外をほぼ一周する形で描かれている絵地図である「泉涌寺より藤森至之図」を始めとする計10図では、近世に刊行された京都図や鳥瞰図と類似した特徴が確認できる。銅版画の挿絵には、『都名所図会』にみられるような上空高くから俯瞰する構図のものと、先述した風景写真に近い構図のものがあり、場所の説明や強調したい事柄によって挿絵の構図を選択しているようである。掲載されている挿絵のうち彩色がされているものについては、例えば、桜の木に彩色することで桜の名所であることを明示するなど、その季節を表現するほか、電灯に色を付けることによって夜の風景を表すなど、見るべき時期と時間を表しているといえよう。

本文中で紹介されている場所の中には、例えば「三条大橋」(1)⁸¹⁾や「誓願寺」(3)などにみられるように、注目すべき記事や伝承

される景物について実に詳細に叙述しているものがある。また、例えば「五条大橋」(15)や「四条演劇」(29)などのように、『都名所図会』にみられた、項目の中に小項目があげられている場所があるほかに、所在のみの簡素な記述に留められた場所もみられる。このように本書では、先述した2つの名所案内記とは異なり次の場所への行程は示されていないが、場所の叙述は実に多様である。

ここに名所として取りあげられる理由（場所の物語や挿絵の特徴）について考察するにあたり、前章2節で述べたように、そこで語られている内容と時期について7つに分類したのが表8である。これによると、前近代の記述によって立項されている場所は本文で計186ヶ所(79.5%)、挿絵で計37図(61.7%)である。挿絵には、「島原遊里」(213)や、「八坂神社並二山鉾の図」(30：計2図)という伝統的な祭礼・風俗が示されている点は、前述の2つの名所案内記にはない傾向であった。しかし、本文中に示される場所の叙述についてみた場合、ここでは寺社に関するものが大半を占めており、例えば祇園会の挿絵にはあるものの、独立した記述はみられないなど、祭礼や風俗、商業や伝統的な産業に関する場所はほとんどみられない点では、先述した2つの名所案内記と共通している。

次に、近代の事象に由来する名所について考察していく。これに該当する場所は本文で計48ヶ所(20.5%)、挿絵で計23図(20.5%)を確認できる。表7のうち、明治期に新設された場所は、「新京極通」(2)や「各宗公試験場」(12)など計44ヶ所が確認でき、ここに示されている項目の多くは、明治以降の新しい産業や工業に関するものであった。また、先述した2つの名所案内記にはみられなかった「盲巫院」(199)や「牢獄」(210)といった公の施設、「師範学校」(196)、「両本願寺火葬場」(54)(図7)など、表8ではその他に分類される場所にも注目される。ことに、

表7 『京都名勝一覧図会』に立項されている場所とその行程

行程	
①	目録 内裏の図(●) 京都名勝方位案内(○) 伏見市中(○) 洛中名勝方角(○) 泉涌寺より藤森至之図(○) 大仏より西大谷並清閑寺に至ル(○) 祇園社より知恩院清水寺至(○) 三條大橋より知恩院より白川山無動寺道(○) 下加茂より大非山至(○) 是より北西山に至る(○) 西山之部(○) 是より南山城より東に至る長田川百丈山へ(○) 小倉池淀より伏見より高橋至(○) 宇治ヨリ山科に至道略(○) 三條大橋(●) [京都沿革] (*1) 仙洞旧院(●) 大宮旧御所(●) 二条城京都府(●) 京都裁判所(●)
②	[1]三條大橋(●) [2]新京極通(*2) [3]誓願寺 [4]誠心院 [5]長金寺 [6]西光寺 [7]蛸薬師 [8]圓福寺 [9]錦天満社 [10]金蓮寺 [11]八坂神社御旅所 [12]各宗公試験場 [13]神宮教会(●) [14]御影堂(●) [15]五条大橋(●) [16]蛭子神社 [17]摩利支天 [18]建仁寺(●) [19]愛宕寺 [20]六波羅蜜寺(●) [21]珍皇寺六道 [22]安井金比羅 [23]驅儂院 [24]点灯局 [25]歌舞練場 [26]女紅場(*3) [27]製茶場 [28]四条鉄橋(*4) [29]四条演劇 [30]八坂神社並に山鉾ノ図(●●) [31]相撲場 [32]知恩院(●) [33]丸山(●) [34]鑛泉 [35]長楽寺 [36]將軍塚 [37]東大谷(●) [38]双林寺 [39]高台寺(●) [40]秋葉山 [41]七観音 [42]伽羅観音堂 [43]八坂塔(●) [44]庚申堂 [45]靈鷲山正法寺 [46]三年坂 [47]奥正寺大谷 [48]大日堂 [49]子安観音 [50]清水寺(●) [51]麦酒製造所 [52]吹上水 [53]清閑寺 [54]両本願寺火葬場(●) [55]小松谷 [56]三嶋社 [57]西大谷(●) [58]新日吉社 [59]阿弥陀峯 [60]智積院 [61]大仏方広寺(●) [62]豊国神社 [63]耳塚 [64]三十三間堂 [65]泉涌寺 [66]今熊観音 [67]東福寺(●) [68]稲荷神社(●) [69]宝塔寺 [70]深草瑞光寺 [71]藤の森神社
③	[72]壇王法林寺 [73]頂妙寺 [74]神道中教院 [75]粟田神社 [76]仏光寺大谷 [77]南禅禅寺(*5) [78]永観堂 [79]若王子神社 [80]光雲寺 [81]鹿ヶ谷 [82]銀閣寺 [83]黒谷 [84]真如堂 [85]吉田神社 [86]百万遍 [87]干菜寺 [88]下加茂神社(●) [89]上賀茂神社(●) [90]御菩薩池 [91]妙園寺 [92]山花平八 [93]御影社 [94]赤山社 [95]魚山 [96]修学院 [97]同下茶屋 [98]比叡山ノ図(*6) [99]三宅八幡社 [100]大非山
④	[101]鞍馬寺 [102]貴船神社 [103]岩屋山 [104]健甞神社(*7) [105]今宮神社 [106]妙顕寺 [107]大徳寺
⑤	[108]焰魔堂 [109]北野神社(*8) [110]平野神社 [111]金閣寺 [112]等持院 [113]龍安寺 [114]妙心寺 [115]仁和寺(*9) [116]三宝寺 [117]梅尾高山寺 [118]槇尾山平等寺 [119]高雄山 [120]護王神社 [121]月輪寺(*10) [122]愛宕神社 [123]清滝川 [124]水野尾 [125]三宝寺 [126]二尊院 [127]釈迦堂(●) [128]大覚寺 [129]天龍寺(●) [130]嵐山福知山(●) [131]大秦広隆寺(●) [132]木嶋社 [133]梅の宮神社(●) [134]松尾神社(●) [135]月読社 [136]桂川鉄橋(●) [137]大枝坂 [138]大原野神社 [139]花ノ寺 [140]桂紙漉場(*11) [141]革製造所 [142]つやの社 [143]西岩倉 [144]三鉦寺 [145]善峰寺 [146]柳谷観世音 [147]粟生光明寺(●) [148]向日明神社(●) [149]長岡天満宮(●) [150]天王山(●) [151]宝寺 [152]離宮八幡宮 [153]城南神社 [154]竹田街道高橋(*12) [155]淀川渡 [156]男山神社 [157]童仙房 [158]百丈山 [159]鷲峰山(●) [160]木津渡 [161]笠置寺 [162]解満寺 [163]伏見舟場(●) [164]鉄工場 [165]巨椋湖 [166]宇治見山 [167]宇治 [168]平等院 [169]興聖寺 [170]三室戸寺 [171]黄檗山(●) [172]一言寺 [173]三宝院 [174]上醍醐寺 [175]下醍醐寺 [176]勧修寺 [177]大石屋敷 [178]日野薬師 [179]花山社 [180]花山院 [181]山科御坊 [182]牛尾山 [183]此近村社寺界 [184]日岡峠(*13)
⑥	[185]勸業場(●) [186]織工場(●) [187]本能寺 [188]妙満寺 [189]本誓寺 [190]舎密局(●) [191]女学校 [192]女紅場 [193]下御霊神社 [194]革堂行願寺(●) [195]療病院(●) [196]師範学校 [197]九条殿旧庭中 [198]宗像神社 [199]盲啞院(●) [200]中学校(●) [201]尺度製作所 [202]斗量製作所 [203]権衛製作所 [204]懲役場 [205]養蚕場 [206]授産所 [207]一条戻り橋 [208]西陣織物物産 [209]神泉社 [210]牢獄 [211]三井銀行 [212]壬生寺 [213]島原遊里(●) [214]六孫王社大通寺 [215]東寺弘法大師(●) [216]西本願寺(●) [217]大教校(●) [218]奥正寺 [219]本国寺 [220]天使社 [221]管大臣社 [222]空也堂 [223]六角堂(●) [224]郵便税則の略(●) [225]電信賃銭表(●) [226]種痘館 [227]相国寺(*14) [228]御所八幡社 [229]集書院(●) [230]因幡薬師(●) [231]仏光寺(●) [232]東本願寺(●) [233]停車場ステーション(●) [京都より汽車賃金表] [京都より大谷記者賃金表]
⑦	官弊社 国弊社 御陵 諸祭官 祭神部 同私祭神部

注1) 本書の構成は、その題号から、①(題号無し)、②三條大橋より名勝順廻記、③是より東北社寺名勝の部、④是より北西の社寺名勝の部、⑤是より西社寺名勝、⑥三條大橋より洛中社寺名勝の部、⑦(題号無し)の7つに区分されている。

注2) 表中に示した(●)は、その項目に挿絵が掲載されている事を示し、[130]八坂神社並に山鉾ノ図(●●)は、そこに計2図の挿絵が掲載されていることを表している。(○)は、地図が示されていることを示している。

注3) 本文中に示した、(*)は、立項されている場所と挿絵に差異が見られるものを示しており、以下の〔〕内は、描かれる場所を示している。(*1)は〔紫宸殿、御所庭中〕、(*2)は〔四条御旅所から三條下るまでの新京極通の俯瞰図〕、(*3)は〔歌舞練場、製茶場、驅儂院、点灯局、祇園町ノ女紅場〕、(*4)は〔鉄橋より両演劇の図〕(*5)は〔鴨東地域の社寺の俯瞰図〕、(*6)は〔比叡山より琵琶湖望図〕、(*7)は〔鞍馬山、船岡山、建勲社、貴船、今宮社、大徳寺〕、(*8)は〔北野社、平野社、金閣〕、(*9)は〔御室、三宝寺、梅尾山、槇尾山、高雄山、護王社〕、(*10)は〔月輪寺、愛宕山、一の鳥居、清滝川、宿屋〕、(*11)は、桂川〔紙漉場、革製場〕(*12)は〔男山社、八幡、淀川、鳥羽、城南宮、高橋、男山への船渡し、童仙房〕、(*13)は〔碑文〕、(*14)は〔東征戦亡之碑写〕である。

表8 『京都名勝一覧図会』で紹介されている項目における記述内容の分類

	時期	総数	A	B	C	D	E	F	G
挿絵	前近代	37	32	0	2	0	0	1	2
	近代	23	3	0	0	0	5	4	11
本文	前近代	186	166	12	2	0	0	1	5
	近代	48	6	1	2	3	15	6	15

注1) 前近代と近代の境界は、明治維新とする。

注2) 表中のアルファベットは、(A)寺社、(B)古跡、(C)祭礼・風俗、(D)商業・店舗、(E)産業・工業、(F)交通、(G)その他を示している。

死者を弔う場所である火葬場が、西洋風の煉瓦造りであるために名勝の一つにあげられていることは興味深いことであり、近世の名所案内記にはみられなかった明治期の新しい特徴の一つといえよう。

本書では、「郵便税則の略」(224)(図8)など、名所の案内に留まらず実用的な情報も積極的に示されている。この点から、本書が

名所案内記として刊行されていながら、近世の『京羽二重』や、『京羽津根』のような節用地誌の側面をもっていたことが見いだせる。このような側面は、種本とした『都名所図会』や、他の秋里籬島作品、あるいは幕末の名所案内記にはみられない特徴であるといってもよい。

次に、記述内容が近代の事象に変更、もしくは加筆された場所としては、「五条大橋」(15)や「九条殿旧庭中」(197)などが確認できる。「五条大橋」では、豊臣秀吉によって現在の位置に移された後の橋の様子が述べられ、明治11(1878)年に現在の橋に架け替えられたことが加えられている。「九条殿旧庭中」は、所在地のみで詳細は記されていないが、明らかに旧九条邸に由来するものであり、近代以降に名勝として認識された場所の一つである。

最後に、本書に取りあげられている京都の

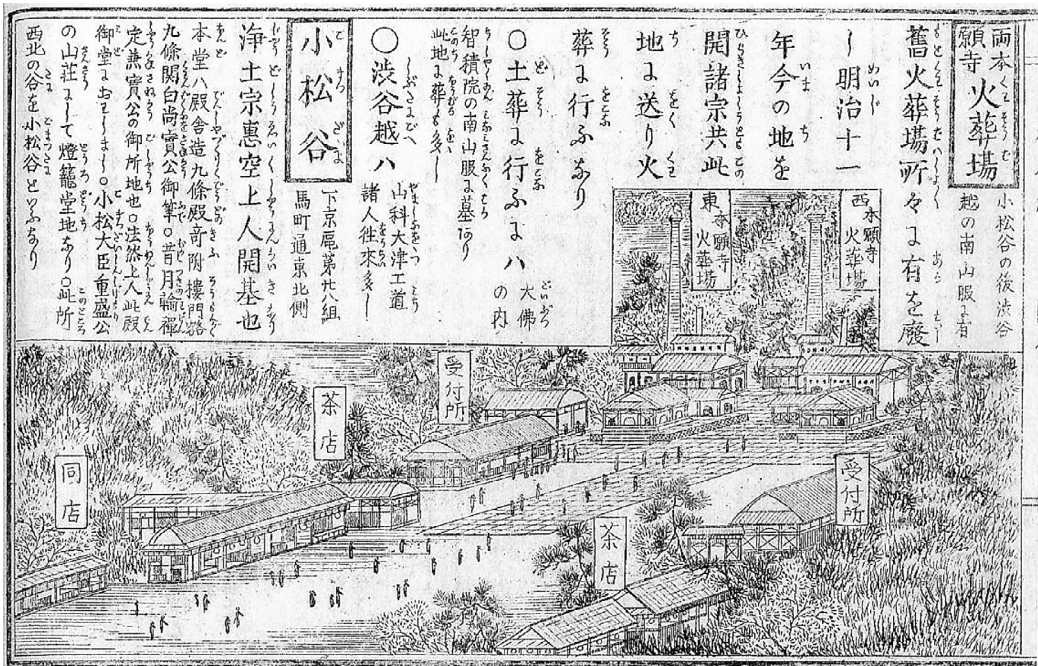


図7 『京都名勝一覧図会』に掲載されている両本願寺火葬場

出典) 橋本澄月『京都名勝一覧図会』風月堂、明治13(1880)年刊、26頁、京都府立総合資料館所蔵

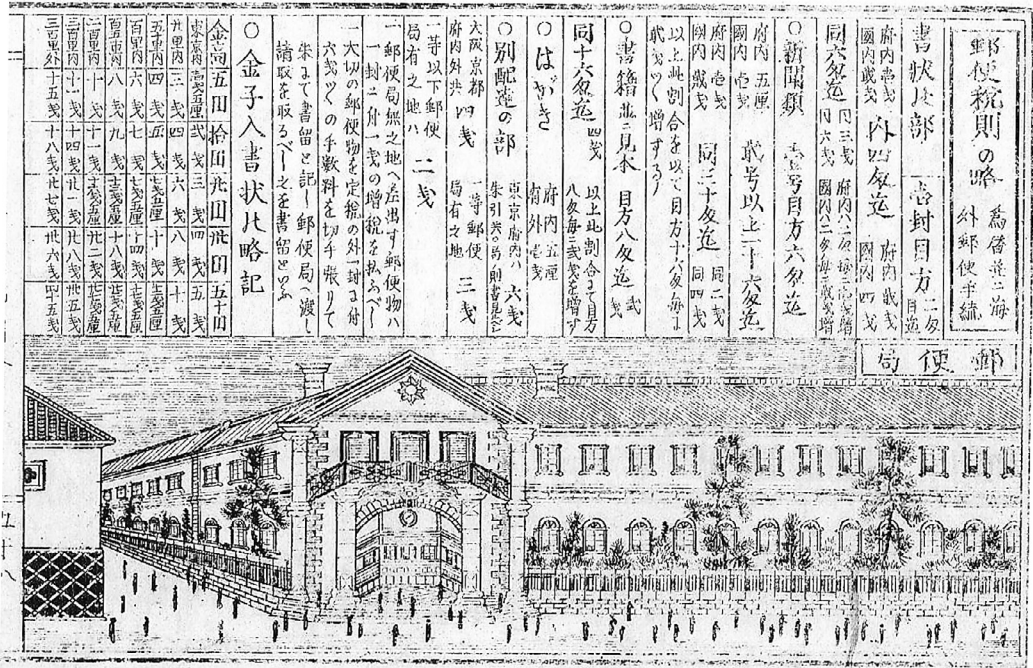


図8 『京都名勝一覽図会』に掲載されている郵便税則の略

(出典) 橋本澄月『京都名勝一覽図会』風月堂、明治13(1880)年刊、58頁、京都府立総合資料館所蔵

様相とその編纂時期についてみていくと、いくつかの叙述内容から、明治12(1879)年の半ばあたりまでの様相を中心にとりあげていることがわかる。したがって本書は、『都名所図会』を種本として編纂されるなど近世以来の伝統的な側面を有している一方で、明治以降の事象に由来する場所については、当時代に合うようにその新しい情報を撰さし、場所の物語や景物を新しい京名所の一つとして追加、もしくは修正していったものといえよう。

IV. おわりに

本稿は、地理学的視点からの近代における名所研究の一環として、これまでには扱われることがなかった明治前期の京都で刊行された名所案内記を研究対象として以下について明らかにしてきた。

まず、明治期の名所案内記の叙述内容をめぐっての、高木による「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的な連続性が強く」という指摘について、個別具体的な名所案内記の検証から得られる知見に基づいて再検討を行うことを目的とし、II章においてその前提となる明治期の京都で刊行された地理的知識を取り扱う書籍に関する刊行動向を整理した。これによって、明治期の京都では11冊の名所案内記をはじめとして、計203冊の地理的知識に関する書籍の刊行を確認した。その刊行動向とその特徴は、鉄道の敷設が計画された時期であり、その開通時に合わせて多くの書籍が刊行されているほか、博覧会や記念祭といった大規模なイベントが企画・開催された時期にこの種の書籍は豊富に刊行されていた。この時期に刊行された名所案内記の特徴は、幕末以来の一種の慣習とも

いえる所作に基づいて編纂された小型のものが多いことが指摘できた。そして、明治期には地誌が継続的に刊行されているという、近世には見られない特徴も明らかとなった。

第2の目的は、明治前期の京都で刊行された名所案内記について編纂者の名所へのまなざしに注目しつつ、明治前期における「京名所」をめぐる場所認識とその実践の様相について考察することであった。これについてⅢ章では、具体的事例として『開化絵入京都見物独案内』、『花洛名所独案内記』、『京都名勝一覧図会』という3冊の名所案内記を取りあげ、それぞれに名所(名勝)として取りあげられる場所とその叙述内容の特徴について整理した。この3つの名所案内記は、その内容から明治12(1879)年後半あたりまでの景物を京名所として取りあげていたことがわかり、これらを比較検討することで、以下のような共通する特徴を見いだすことができた。

明治前期の京都における名所案内記による京名所の立項とその叙述内容の関係は、(1)近世以来の伝統的な事象や景物に基づいて名所として取りあげられている場所、(2)近世以来の名所であったが、近代以降の事象や景物に基づいて名所として取りあげられていた場所、(3)前近代の事象や景物に基づいて近代に創出された場所、(4)近代化のシンボルとして新たに創出された場所という、4つにパターン化できるだろう。

そして、ここに取りあげられている京名所については、その大半が寺社に関するものであったが、これは明治前期においても宗教都市の側面が強かったためであろう。しかし一方で、近世の名所案内記では必ずといって良いほど取りあげられていた、祭礼・風俗に関するもの、商業や伝統産業についての立項と、その叙述はほとんどみられなかった。この背景としては、明治期に繁昌記など他の案内記類との分節化が進んだ結果、名所案内記の叙述から姿を消したとも考えられよう。近

代以降に創出された場所では、近代的な工場や西洋造りの学校などの建築物や鉄道に関する場所では、「美観」や「壮麗」といった表現が与えられていることがわかる。

最後に、明治10年代に刊行された名所案内記における、「名所」や「名勝」としての場所の表象化について言及するとすれば以下のようになれるだろう。まず「名所」とは、名所観といった編者の場所認識によって見いだされる他所との差異化であり、これらは場所イメージの生産(再生産)の実践といえるのではないだろうか。これを前提とすれば、第1に、由緒や場所の物語が特に秀でている場所では、それらに基づいて「名所」として他所との差別化が行われているのだろう。第2に、明治以降の場所では、その概要(機能)や挿絵を示し、前近代との時間的な差異を強調することで「名所」としての差別化を行っているであろう。第3に、祭礼が行われる場所では、その形態や様子を視覚的に示すことで、ハレ(非日常)の場所であるという空間的な差異を強調することで、「名所」としての差別化をはかったものと思われる。第4に、煉瓦や鉄骨を用いた西洋風の建造物の外観は、それ自体が他所との差異を示すのに十分であり、これによって「名所」とされたのではなかろうか。

ただし、本稿で検証してきたような、明治前期の京都における名所案内記編纂者の「名所」をめぐる場所認識と表象化や、「場所イメージ」の生産(再生産)という行為は、必ずしも編者独自のまなざしに依拠するものではなく、編纂の過程において、例えば『都名所図会』などといった近世の名著を種本としながら、その時代に適合するように編纂していくという伝統的慣習にしたがった実践であるという側面も少なからずあった。つまり、この伝統的な慣習と編纂姿勢が、先述したように「明治10年代の名所記が近世における名所記との内容的な連続性が強く、一つ一つが

個性的な叙述であったのとは違」うという高木の指摘つながっているのであろう。

しかし本稿では、明治10年代に刊行された名所案内記のうち、3つの案内記にしか言及できていない。本稿で扱ってきた問題の解明には、より多くの資料を議論の遡上にあげるとともに、書誌的なデータベース構築が必要となろう。また、本文中でも、幾つかの今後の課題を示しており、本稿は必ずしも十分な成果とはいえない。これらについては、今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿は、平成23・24年度文部科学省科学研究費 特別研究員奨励費23・4324「近世・近代の京都および周辺都市における名所観の成立と変容」(代表者 長谷川奨悟)の研究成果の一部である。

本稿骨子は、2011年11月に開催された人文地理学会大会(於:立教大学)において発表した。本稿をまとめるにあたり、神戸大学人文学研究科所属の長谷川孝治先生、大城直樹先生にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。

(神戸大学・人文学研究科・院生・
日本学術振興会特別研究員(DC))

〔注〕

- 1) 野間光辰「開化絵入京都見物独案内」(新選京都叢書刊行会編『新選京都叢書 第8巻』臨川書店、1987)、2-3頁。
- 2) 本研究で用いる名所案内記とは、例えば近世において刊行された『京童』や『都名所図会』に代表されるような、名所や名勝とされる場所や景物を主体として扱ってきたものに限定し、商工案内などについてはこれとは区別して用いることとする。
- 3) 本研究で用いる案内記類とは、名所や名勝に関する名所案内記の他に、買い物に便の良い商工案内記や買物案内の類いのもの、そして、近世では「町鏡」と称された町名案内などといった、場所や事物を案内することを目的とした書籍を総合する語として用いることとする。
- 4) 山本光正「旅行案内記の成立と発展」国立歴史民俗博物館研究報告155、2010、109-135頁。
- 5) 岩佐淳一「旅行とメディア—戦前期ガイドブックのまなざし—」学習院女子大学紀要3、2001、11-27頁。
- 6) 羽生冬佳「明治以降戦前までの名所の成立・変遷に関する研究」ランドスケープ研究68-5、2005、843-848頁。
- 7) 馬場知子「名所本にみる近代東京の都市風景の変容について」ランドスケープ研究67-5、2004、623-628頁。
- 8) 西田正憲「明治後期にける瀬戸内の近代的風景の発見と定着」ランドスケープ研究58-2、1994、211-217頁。
- 9) 加藤政洋「都市の近代化と『近郊の名所』の創出—鹿児島市の榎木馬場を事例として—」流通科学大学論集16-3、2004、89-105頁。
- 10) 島津俊之「明治・大正期における『熊野百景』と風景の生産—新宮・久保写真館の実践—」人文地理59-1、2007、7-27頁。
- 11) ①三木理史「奈良県刊行の『府県写真帖』に関する考察」総合研究所所報16、2008、59-71頁、②三木理史「『奈良写真帖』に関する考察」総合研究所所報18、2010、101-110頁。
- 12) 網島聖「明治後期地方都市における商業名鑑的『繁昌記』の出版—山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に—」史林93-6、2010、119-144頁。
- 13) 『新選京都叢書』全12巻には、江戸期から昭和初期に刊行された、全53冊の地誌類と、計10図の絵地図類が収録されている。野間光辰は、個々の資料の「解題」の中で、資料の体裁や収録する際に採用した出典、内容の概略といった基本的情報の整理を行っている。新選京都叢書刊行会編『新選京都叢書』臨川書店、1985-1989。
- 14) 工藤泰子「近代名所案内記にみる京都の観光空間」京都光華女子大学研究紀要47、2009、15-48頁。
- 15) 高木博志「近代京都と桜の名所」(丸山宏・

- 伊從勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版, 2008), 141-173頁。
- 16) 笠原一人「背景としての東山」(加藤哲弘・中川理・並木誠士編『東山／京都風景論』昭和堂, 2006), 59-79頁。
 - 17) 前掲15) 159頁。
 - 18) 拙稿「近世上方における名所と風景—『都名所図会』・『撰津名所図会』を事例として—」人文地理64-1, 2012, 19-40頁。
 - 19) 例えば, ①高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店, 2006, ②伊藤之雄『京都の近代と天皇』千倉書房, 2010, などがあげられる。
 - 20) 例えば, ①小林丈宏『明治維新と京都』臨川書店, 2004 (初版1998), ②布引敏雄『榎村正直』文理社, 2011, があげられる。
 - 21) 前掲20) ①1-6頁。
 - 22) 村山弘太郎「近世京都の利益信仰—『名所地誌本』による社会的位置付け—」史泉98, 2003, 19-35頁。
 - 23) 前掲18)。
 - 24) 京都市編『京都の歴史 第8巻 古都の近代』学芸書林, 1975。
 - 25) 前掲20) ①1-6頁。
 - 26) 白井哲也『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版, 2004, 3-17頁。
 - 27) 島津俊之「明治政府の地誌編纂事業と国民国家形成」地理学評論75-2, 2002, 88-113頁。
 - 28) 石田龍次郎『日本における近代地理学の成立』大明堂, 1984。
 - 29) 高木博志「史蹟・名勝の成立」日本史研究351, 1991, 63-88頁。
 - 30) 中西僚太郎「明治・大正期の敵島を描いた鳥瞰図」歴史人類38, 2010, 57-58頁。
 - 31) 関戸明子「鳥瞰図にみる近代—草津温泉を事例として—」歴史地理学54-1, 2012, 39-53頁。
 - 32) 中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験』ナカニシヤ出版, 2008。
 - 33) 前掲1) 2-3頁。
 - 34) 前掲15) 159頁。
 - 35) 京都出版史編集委員会編『京都出版史』京都出版史刊行会, 1991。
 - 36) 京都府立総合資料館『京都府資料目録』京都府立総合資料館, 1984。
 - 37) 前掲35) 422-423頁。
 - 38) 案内記類の定義は, 前掲3) による。
 - 39) 名所案内記, 買物案内, 町名案内といったものを分類した。
 - 40) 地誌の他に, 節用地誌, 地誌的記述が多く含まれる絵図・地図もこれに分類した。
 - 41) その他には, 案内記, 地誌, 写真帖以外の地理に関する書籍のうち, 地理教育のための教科書や, 絵画集もこれに含めた。
 - 42) 京都市編『京都の歴史 第10巻 年表・辞典』学芸書林, 1976, 447-448頁。
 - 43) 前掲24) 283-28頁。
 - 44) 拙稿『『雍州府志』にみる黒川道祐の古跡観』歴史地理学51-3, 2009, 25-43頁。
 - 45) 『京都府管内地理問答』は, 地理に関する一問一答形式の問題集である。表1では, その他に分類している。
 - 46) 京都府立総合資料館編『京都府立資料館所蔵改訂増補文書解題』京都府立総合資料館, 1993, 84-85頁。
 - 47) 前掲28) 9-13頁。
 - 48) この経緯と官民の地誌の関係については今後の課題の一つとしたい。
 - 49) 前掲35) 27-199頁。『京都出版史』の刊行目録では, 天地×左右の寸法 (cm), もしくは, 「菊」(菊判カ) と記載・冊数・「和」(和本) とった製本の種類が示されている。
 - 50) 和本の版型の分類は, 内田啓一『江戸の出版事情』青幻社, 2007, 90頁によっている。
 - 51) 川勝徳次郎『花洛名所案内記』, 明治24年 (1891) 刊 (初版明治13 (1880) 年), 京都府立総合資料館蔵。
 - 52) 山近博義「『京都もの』小型案内記にみられる実用性」(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間—足利健亮先生追悼論文集—』大明堂, 2000), 361-371頁。
 - 53) 前掲1) 2-3頁。
 - 54) 本稿は, 場所に関する案内記の検証を主題としているため, 商工案内である『都の魁』に関しては今後の課題としたい。また, 本書についての研究は, 野間光辰「都の魁」新選京都叢書刊行会編『新選京都叢書 第6

- 卷』臨川書店、1985、1-2頁がある。
- 55) 「商業」には、近世以来の町鏡や商工案内記などに取りあげられてきた、著名な商家や飲食店に関する場所をこれに含めた。
- 56) 「産業」には、西陣など近世以来の伝統的な産業の他、明治期以降の工場など、京都の製造業に関する場所をこれに含めた。
- 57) 「交通」には、近世以来の名所案内記に取りあげられてきた三条大橋や五条大橋といった名橋の他、停車場や鉄橋といった鉄道に関連して敷設された場所もこれに含めた。
- 58) 文字富之助編『開化絵入京都見物独案内』片岡賢三、明治18年(1885)刊、京都府総合資料館蔵。
- 59) 前掲58) 33頁。
- 60) 前掲58) 33頁。
- 61) 前掲52) 361-371頁。
- 62) 前掲18) 26頁。
- 63) 本節において、以下に示す項目の後の()は、表3に示した番号に対応している。
- 64) 前掲58) 4頁。
- 65) 東谷智「転換する社会」(藤井謙治・伊藤之雄『日本の歴史 近世・近代編』ミネルヴァ書房、2010)、97-116頁。
- 66) 拙稿『『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象』人文地理62-4、2010、74頁。
- 67) 『京都名所撮影』発行年不明、国際日本文化研究センター所蔵(京都名所撮影データベース) <http://www.nichibun.ac.jp/meisyozue/satsuei/c-pg8.html> (最終閲覧日2012年8月19日)
- 68) 前掲67)。国際日本文化研究センターの京都名所撮影データベースにおける本資料の解説には、『『京都名所撮影』は明治初期に京都の桑田清新堂から発売された写真集で、表題として日本語の「京都名所撮影」と共に、英語で「JAPAN KIYOTOMEISHO PHTOGRAPHER」と記されていることから、外国人用の土産物として発売されたものと思われる。なお、本書は明治13(1880)年に京都の住人が入手したものである。(下線部は筆者の加筆)とあることから、明治前期にはすでに刊行されていたと考えられる。
- 69) 前掲58) 29-30頁。
- 70) 前掲42) 436-437頁。
- 71) 編纂時期と刊行年に数年のひらきがあるが、この背景については今後の課題とした。しかし、このような事例は、例えば『撰津名所図会』では書誌と著作権の関係で刊行が遅れ、巻の順番が前後したように近世においても生じていた問題でもある。これについて筆者は、前掲18) でこの問題にふれている。
- 72) 前掲51)。
- 73) 前掲51) 47頁。
- 74) 前掲51) 45-47頁。
- 75) 本書に立項された場所について、起点となっている三条大橋を、便宜上[1]として項目立てがなされている場所を数えていくと計118ヶ所となり、目録とのずれが生じるが、これについては本稿で取りあげる京都府立総合資料館所蔵本が再版本であり、再版時に改編が行われた可能性も考えられる。しかし、たとえ初版であっても、近世の『都名所図会』などといった先行する名所案内記においてもみられるものであり、このずれに関しては既存の名所研究でも取りあげられてこなかった事象の一つであったといえよう。
- 76) 本節において、以下に示す項目の後の()は、表5に示した番号に対応している。
- 77) 橋本澄月『京都名勝一覽図会』風月堂、明治13年(1880)刊、京都府立総合資料館蔵。
- 78) 前掲77) 63頁。
- 79) 前掲77) 1頁。
- 80) 前掲66)。
- 81) 本節において、以下に示す項目の後の()は、表7に示した番号に対応している。